

第十二回

孔明智を用いて周瑜を激し 孫権計を決して曹操を破る

— 赤壁前夜 (一一) —

「判官ほうがんびいき(ほうがんびいき)」という言葉があります。悲劇的英雄の源義経みなもとのよしつね (判官ほうがん)に同情する気持ちから、弱者、敗者を声援する感情をいいますが、後漢末の戦乱のなか、草鞋わらじを編んだ境遇から身を起こし、関羽や張飛や諸葛亮との終生しゆうせい変わらぬ情愛をつらぬき、最小の蜀を率いて強大な魏に立ち向かった姿に、誰しもが劉備主従に感情移入をしてみました。『三国志演義』は、曹操は悪玉で劉備は善玉という描きかたをします。

しかしこの二つの勢力の間に割って入ってくるのが、呉ごの国です。じゃんけんでグーとパーだけだとかんたんに勝ち負けが決まりますが、そこへ横からチョキをだすのがでてくると、そうは簡単にいかないのがじゃんけんの複雑さです。

同様に、『三国志演義』の世界を格段に魅力あるものにしていくのが、呉ごの国の存在です。三国の絡み合いが興味津々きょうみしんしん、読んで巻を置くあたわずの世界に人々を引き込んできたのでした。これが、三国志の魅力の源泉です。

では、呉の人々は、『三国志演義』ではどのように位置づけられているのでしょうか。

また、その描き方は、歴史書の『三国志』にくらべてどのようなものだったのでしょうか。そのあたりを中心にこれから、「赤壁の戦い」前夜の情勢を見ていきたいと思います。

○周瑜の登場

『三国志演義』で、諸葛亮の最初のライバルとして登場するのが、呉の周瑜です。諸葛亮より六歳年長。周瑜は「赤壁の戦い」から荊州争奪戦にいたるまで、諸葛亮をことあるごとにライバル視して対立しますが、いつも諸葛亮にしてやられます。

歴史書『三国志』によれば、周瑜は盧江郡舒県の出身で、代々名門の家系に生まれます。その風貌も名門の子にふさわしい凛々しさがあり、周郎（周の若殿）と呼ばれていました。孫堅が董卓討伐の旗揚げをしたとき、家族を舒県に移住させますが、この時、周瑜は自分と同じ年の孫策と知り合って親交を結びます。のち、袁術から自立した孫策は周瑜と再会し、ともに力を合わせて江東地方に勢力を伸ばしていきます。

孫策と周瑜とともに、喬公の二人の娘で絶世の美女とされる姉の大喬、妹の小喬をそれぞれ妻とします。しかし、孫策は刺客に襲われ、二十六歳の若さで命を落としました。周瑜はこの後、孫策の後を継いだ孫権を補佐します。孫権の母呉氏は、周瑜をわが子同様に思

つています、ですからあなたも兄と思ってお仕えしなさい、と孫権に言い聞かせています。孫策亡きあと孫権を支える呉の中心人物でした。

さて『三国志演義』では、

曹操の大軍を前に、降伏か開戦かいずれか決断を迫られた孫権は、呉国太（こくにんたい）（孫権の母の妹。孫権は実母の死後、彼女に対し実母同然に仕えた）に言われて兄孫策の遺言を思い出し、鄱陽湖（はよこ）で水軍の訓練をしていた周瑜を呼び寄せます。

周瑜は降伏・抗戦両派の訪問をうけますが、自らの本心を明かしません。しかし諸葛亮に、曹操が江南に進撃した真の理由は、彼の美人の妻小喬（しょうきょう）をわがものにするためだと挑発され、思わずカッととなって、曹操と戦うと自分の本心を言ってしまう。

これは『三国志演義』のフィクションですが、このあともいつも諸葛亮に一本取られてしまう漫画のような周瑜が描かれます。しかし『三国志演義』は歴史小説ですから『三国志』の史実も取り入れねばならず、大活躍する周瑜といつも諸葛亮の後塵（こうじん）を拝してしまう周瑜との間に、不自然なギャップがあります。そのあたりを見ていただければと思います。

(本文抄)

二人（周瑜と魯肅）は、降伏か開戦かを言い争ったが、諸葛亮は袖そでに手を入れ笑っているだけだった。

周瑜は言った。

「先生は何をお笑いになるのか」

「私が笑ったのは、子敬しけい（魯肅）どのが時勢をご存じないからです」

「私が時勢を知らないと言われるのか」と魯肅。

「その通りです。公瑾こうきんどの（周瑜）が曹操に降伏しようとされるのは、まことにもつともなことです」と諸葛亮。

「さすがは孔明どの、きっと私と同じ気持ちなのだろう」と周瑜。

「孔明どのまで、そんなことを言われるのか」と魯肅。

「曹操はきわめて用兵たに長けており、天下に並ぶ者はありません。以前は呂布りよふ・袁紹えんしやう・袁術えんじゆつ・劉表りゆうひやうなどが対抗しましたが、今や彼らはみな曹操に滅ぼされ、誰もいなくなりました。た

だ劉豫州だけは時勢を知らず、やみくもに争おうとしていますが、今や孤立無援、命も危ないような状態です。将軍が曹操に降伏されたなら、妻子を保ち、富貴をまっとうされること

でしよう。国家の命運は天命にゆだねるしかなく、惜しむまでもありません」と諸葛亮。

魯肅は激怒し、

「おまえは、わが君に膝を屈して辱めを受けよというのか」

「私に一つの計略があります。これによれば、ただ一人の使者を派遣して、小舟に二人の者に乗せて送りとどけるだけでよろしい。曹操がこの二人を手に入れたならば、百万の軍勢はみな鎧を脱ぎ旗を巻いて引きあげるでしよう」と諸葛亮。

「その二人とはいったい何者だ」と周瑜。

「曹操は漳河のほとりに、壯麗を極めた『銅雀台』を築き、天下から選りすぐった美女で満たしていると聞きました。色好みの曹操は、かねてから江東の喬公に二人の娘があり、上の娘は大喬、下の娘は小喬といい、『沈魚落雁（魚も水中にかくれ、飛んでいる雁も落ちるほどの美しさ）』、『閉月羞花（月も光を消し、花も羞じらうほどの美しさ）』の美貌の持ち主だと聞いて、こんなことを申したそうです。

すなわち『わしの一つの願いは天下を平定して、皇帝になること。今一つの願いは、江東の二番を手に入れ銅雀台に置いて、晩年を楽しくすごすことだ。これがかなえば、死んでも思い残すことはない』というものです。今、百万の軍勢を率いて、江南を狙っているのは、

実はこの二人の女性のためです。將軍はこの喬公を訪ね、千金をもつて二人を買い求め、曹操に送りどどけるのがよろしいと思ひます。曹操は彼女たちを得れば、満足して兵を返すに相違ありません。これぞ范蠡はんれいが美女西施せいしを呉王夫差ふさに献上した計略です。すみやかにこの計略を実行なさるのがよろしい」と諸葛亮。

「曹操が二喬を手に入れたがっているという証拠はあるのか」と周瑜。

「曹操の三男の曹植そうしよくは、筆を下せば文を成すという文才の持ち主ですが、曹操は以前彼に命じて、『銅雀台の賦ふ』と題する一篇の賦ふを作らせました。その内容は、曹操が天子となり、誓つて二喬をわがものにするというものです」と諸葛亮。

「貴公はその賦を覚えておいでか」と周瑜。

「華麗かれいな文章なので、暗記しています」と諸葛亮。

「では一つ、お聞かせください」と周瑜。

(※ここで諸葛亮は「銅雀台の賦」を暗誦してみせますが、長くなるので一部のみ記します。銅雀台の華麗さをうたった後に、以下の句が続きます)。

二喬を東南よりとり

ちようせき

朝夕共にあるを樂しまん

皇都こうれいの宏麗こうれいなるを俯み
雲霞うんかの浮動ただようを瞰み
雲霞うんかの浮動ただようを瞰み

(二番を東南の地から連れて来て、朝夕楽しみを共にしたいと思うとの一節に)
周瑜は顔色を変えて立ち上がり、北を指さしながら罵ののしった。

「老いぼれめ、よくも私をバカにしたな」

諸葛亮は急いで立ち上がり、

「昔、匈奴きょうどの单于ぜんうがしばしば国境を侵おかしたとき、漢の天子は公主(皇女)を嫁とつがせて和平を結びました。今、どうして二人の娘むすめごときを惜おぼしまれるのですか」

「大番は孫伯符將軍の夫人であり、小番はほかならぬ私の妻なのだ」と周瑜。

諸葛亮は、いかにも恐縮したふりをして言った。

「私は、それを知らなかったのです。うっかり口を滑すべらせたこと、どうかお許ゆるしてください」
「私は、あの老いぼれを生かしてはおかない」と周瑜。

「よくよくお考えになるべきです。後悔こうかいしても追いつきませんぞ」と諸葛亮。

「私は伯符どのから遺託いたくを受けたのだ。どうして身を屈まして曹操に降伏こうふくなどできようか。さ

きほど言ったのは、あなたの心を探るためだ。私は鄱陽湖はようこを離れたときから、北方征伐の決意を固めていた。たとえこの首が切り落とされようとも、決心は変わらない。どうか孔明どのには、ともに曹操を打ち破るため、力をお貸しいただきたい」と周瑜。

「犬馬けんばの労を尽くす所存です。いつでもご指示にいたします」と諸葛亮。

「明日、殿にお目通りし、ただちに出兵について協議いたそう」と周瑜。

諸葛亮と魯肅は辞去し、それぞれ立ち去った。

(解説)

ここは、本心を明かさずとぼけていた周瑜がみごとには諸葛亮の策にはまり、カツとなつて本心を言ってしまう場面です。これは『三国志演義』のフィクションで、そもそも銅雀台が出来上がるのは「赤壁の戦い」の二年後です。

「銅雀台の賦」は曹植の詩とされますが、実際は作者が誰かははっきりしませんし、「東南より二喬をとりて、朝夕ちゆうせき共にあるを楽しまん」の一節は賦にはありません。ですから、曹操が周瑜の夫人である小喬を手に入れて、銅雀台において晩年を楽しみたいというのはいない話です。

この後、『三国志演義』は『三国志』から引用して、周瑜が孫権と居並ぶ幕僚を前に、大勢を決する名演説を行なう場面を描きますが、こちららは史実の論客として一流の周瑜なので、「諸葛亮にしてやらる周瑜」とのギャップがすごいです。

(本文抄)

翌朝、孫権は正堂に出た。

左側には張昭・顧雍こようら文官が三十人余り、右側には程普・黄蓋こうがいら武官が三十人余り居並ぶ。しばらくすると周瑜が入って来た。

「殿には文武の官と協議なさいましたか」と周瑜。

「連日、この事を協議しているのだが、降伏を勧める者もいれば、戦いを主張する者もあり、いずれとも決めかねているのだ。それゆえ、あなたの意見を聞かせてもらいたいのだ」と孫権。

「誰が殿に降伏を勧めているのですか」と周瑜。

「張子布ちようしふ(張昭の字)らはみな、そうだ」

周瑜は、張昭に向きなおって言った。

「先生が降伏を主張される理由をお聞かせください」

「曹操は天子を擁して四方を征伐し、何かにつけて朝廷の命令をかかれています。近ごろは荊州を手に入れ、その威勢はますます強大になっています。わが江東が曹操に対抗できるのは、長江あればこそです。今、曹操の戦船は千や二千にのぼります。これで水陸両面から攻めて来たなら、どうして対抗できましようか。ここはひとまず降伏したうえで、改めてあとの計画を練ったほうがよろしいでしょう」と張昭。

周瑜は、

「江東は開国以来、今に至るまで三代を経ているというのに、どうしてこれを簡単に放棄することができましようか。曹操は漢の丞相（じょうしょう）の名をふりかざしておりますが、実は漢の逆賊にほかなりません。將軍（孫権を指す）はすぐれた武略（ぶりやく）と雄大な才能（ゆうだいたい）に加え、父兄の残された広大な領土を受け継がれて江東に割拠（かつきょ）しておられます。江東は、兵は精銳、食糧は充足しているのですから、天下狭しと闊歩（かつぽ）し、国家のために残虐な者を平定されるべきです。どうして逆賊に降伏することがありましようか。

しかも、このたびの曹操の出陣は、兵法から見て多くの弱点を有しております。

第一に、北方はまだ平定されておらず、馬騰（ばとう）や韓遂（かんすい）が背後から脅かしておりますのに、曹

操は南方征伐に時間を費やしています。

第二に、北方の軍勢は水戦に不慣れであるにもかかわらず、曹操は馬を棄て船によつて、わが呉と合戦しようとしております。

第三に、おりしも冬のまっさかり、嚴寒の季節で、馬には秣まぐさがありません。

第四に、中原ちゅうげんの兵士を駆り立て、はるばる河や湖の多い地まで攻めて来たのですから、兵士は風土に適応できず、多くの者が病気に倒れています。

曹操の軍勢はこれらの弱点を有しておりますから、多勢たせいとはいえ敗北するのは必定ひつじょうです。將軍が曹操を生け捕りにするのは、今日ただ今においてはありません。私に数千の精銳をお与えくだされば、前進して夏口かこうに駐屯し、將軍のために曹操を破つてみせましょう」と周瑜。

孫権は立ち上がって言った。

「あの老賊は、かねてから漢を滅ぼし自ら天子になろうと狙つておる。やつが恐れるのは二袁（袁紹・袁術）・呂布・劉表と私だけだ。今すでに他の者は滅び、私だけが残っている。私が生きている限り、あの老賊に勝手なまねはさせないぞ。あなたの老賊討つべしという意見は、私の考えとびつたり一致するものだ。これは、天があなたを私に授けてくださったというものだ」

「私は將軍のために、万死も厭いといません。ただ將軍がお迷いになり、ご決心がつかないことだけが気がかりです」と周瑜。

それを聞くと、孫権は腰におびていた劍を抜き、目の前の机の一角を斬り落として言った。「二度と私に、曹操に降伏せよと言う者がいれば、この机と同じ目にあうぞ」

言いおわると、その劍を周瑜に授け、周瑜を大都督だいたとく（総司令官）、程普を副都督（副司令官）、魯肅を贊軍校尉さんぐんこういに任命し、都督の命令に従わない者がいればこの劍で切つて捨てよと命じた。

（解説）

兄孫策が見抜いたように、孫権には兄のような果断な決断は欠けていましたが、部下の意見をよく聞いて、その力を尽くさせるといふ長所が生まれました。それぞれが意見を述べ尽くした上で、孫権陣営は曹操と決戦することにまとまります。

周瑜は亡き孫策と同様、相手がどんなに強大であろうとその弱点を見抜き、敢然と立ち向かっていきます。そこが張昭ら文臣の降伏論者との違いでした。

周瑜は、必ず勝機があることを理路整然と述べます。そして、孫権が最後の決断を下しま

した。孫権は刀を抜いて目の前にある机の角を切り落とし、「曹操に降伏せよと言う者は、この机と同じ目にあうぞ」と見得を切りました。なかなか役者やのー、といったところですよ。ここは、『三国志』の記述通りで、フィクションではありません。

こうして孫権は、しゅんじんしゅん 逡巡の末に曹操との全面対決に踏み切ったのでした。

ここで、『三国志演義』は『三国志』の記述をそのまま引いているので、その意図とは裏腹に一つミスをしています。

孫権の最後の決意表明で、「やつが恐れるのは袁紹・袁術・呂布・劉表と私だけだ。今すでに他の者は滅び、私だけが残っている」と書きます。劉備が抜けています。

実際の「赤壁の戦い」で、曹操軍を破ったのは周瑜率いる呉軍でした。劉備は『三国志演義』が描くほどには活躍していません。ですから、ここで劉備が抜けていても史実としては間違いないのですが、『三国志演義』は劉備や諸葛亮が主人公ですから、ここは書き入れねばならないところです。前回の孫権と諸葛亮との対話の中では、曹操が恐れるのは「呂布・劉表・袁紹・袁術、それに劉豫州どの」、とわざわざ劉備の名を書き入れています。この最後の場面は、作者が『三国志』の記述通りに引用して、うっかり劉備を書き忘れたのでしよう。